
Tales Of Legendia Another Apocalypse

大佐

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

Tales Of Legendia Another Apocalypse

【Nコード】

N6267Z

【作者名】

大佐

【あらすじ】

クルザンド王統国軍と聖ガドリア王国の戦争はすでに20年以上経過していた。その戦いの中、2人の男女が出会い、そして2人は1つの大陸を渦巻く、巨大な相手との戦いを多くの仲間たちとともに潜り抜けていくことになる。

―第1話―（前書き）

テイルズオブシリーズとエースコンバット。これまでコラボされることのなかった2つの作品をコラボし、更に独自の世界観を構築していきます。純粹にテイルズとかエースコンバットか考えず、1つの物語として読んでいただければ幸いです。因みにHALOはオマケ程度です

―第1話―

……いつの世も、些細な行き違いから悲劇が生まれる物である。
20年の長きにわたる戦争も、その悲劇の1つであっただろう。

聖歴980年から続く戦争は、一般的には20年戦争、或いはガドリア戦争と言われる。それは、2国の主役のうちの一方の国名を関したものであり、同時に最初に戦争の口火を切った側に対する、一種のあてつけであっただろう。そもそも、戦争が発生した経緯を考えれば、あまりの馬鹿馬鹿しさに誰もが呆れかえる。

事の発端は聖歴956年に発生した1つの事件に起因するが、それ以前にも大きな緊張関係そのものはあった。クルザンド王統国が、当時無政府地帯に蔓延っていた盗賊団討伐の為に軍を派遣し、討伐に成功したのち、その領土を自らの国の領土と定めた。後にイーリオス州と呼ばれるその地域は、だがその直後に聖ガドリア王国が、その地域の領有権を唱えたのだ。その土地はかつて、聖ガドリア王国の宗主国である源聖レクサリア皇国の領土であり、そして聖ガドリア王国には、その領土を継承する義務があるという物であった。

無論、この論法はあまりにも粗雑であったし、またその地域自体も、クルザンド王統国が建国される以前に存在した大国オーシア連邦の領土であったのだ。確かに無政府地帯となつて久しい地域であったが、それだけに誰が自国の領土としてもおかしくない環境だったのである。にも拘らずガドリア側がその土地をよこせと言ってくる。無論それは聞きいられないものであり、クルザンド王統国政府は、当然、その要求を拒否した。

この程度の小競り合いは、実のところ今までも数多くあった。政治的な解決策は常に、最終的には譲歩という形で終わってきたのだ。そしてこの場合、ガドリア王国側が譲歩したようにクルザンド政府側は考えた。実際、ガドリア王国は24年間、抗議はすれども武力を用いる事はなかった。ガドリア王国はその地政学上から軍事力に

力を注いできた国家であったが、むやみやたらに好戦的というわけではなかったのだ。そのため、最終的にはこのまま、うやむやのままだと終わると誰もが考えていたのだ。

その希望的観測は、聖歴980年に破られることになる。その前に発生したイーリオス事件を契機に、ガドリア軍が退去としてイーリオス州に攻め込んだのだ。それに対して、クルザンド軍は満足な迎撃ができず、隣接するエリシオン州に撤退することになる。当初は、そのままイーリオス州を手に入れたガドリア側が矛を収めるのではないかと思われていた。戦争を仕掛けた大義名分が、そのイーリオス州の奪還であったからだ。それ以上の不要な戦火の拡大を望まない。そう思われていた。ところが、ガドリア軍は更にエリシオン州に攻め込んだのである。

「劣等民族オーシアンを滅ぼし、世界を永続させよ！」

これが彼らのスローガンだった。気が付けば、本来ならば小さな領土問題であったはずのそれが、聖ガドリア王国とクルザンド王統国の全面戦争に発展し、そして両国は主にイーリオス州を舞台に殺し合った。ひたすらに殺し合い、そして聖歴995年にクルザンド軍がイーリオス州を奪還することに成功する以外、その戦争は常に硬直状態だったのだ。

無論、それを両国は望まなかった。長きにわたる戦争は、両国の経済を破壊し、崩壊へと導いていくものである。聖ガドリア王国は宗主国である源聖レクサリア王国に救いの手を求め、クルザンド王統国はかつてオーシア連邦という1つの国家であった時の同胞であったエメリア共和国の経済的援助と、ベルカ公国をはじめとした傭兵派遣を生業とする国家に軍事力を支えられながら戦い続けてきたのである。

各国はこの2国の戦争によって利益を得たが、その一方で戦争終結のために手を撃たなかったわけではない。特にオーシア連邦を構

成し、そして分裂した各国にとって、クルザンド王統国がこのまま戦い、そしてガドリアの手によって滅亡させられてしまうということは、そのまま自国の運命がそれに追従すると思った。そしてそれは紛れもない事実であったのだ。レクサリア系の人間たちとオーシア系の人間たちの間には拭い難いほどの格差があったのだ。ガドリア人やクルザンド人、そしてその戦争に傭兵として参加した者たちは、敵国人に対しての差別意識を次第に敵に対する敬意に変えていくことができたが、実際に戦ったことがないものはその差別意識をより増して行った。レクサリア近衛軍司令官エド・カーチスは、自国の将軍たちがその地位にふさわしくない罵詈雑言を重ねていくのに辟易し、だがそれを批判することができないほどに国内の民族主義は沸騰していたのである。まるで活火山が噴火する直前の活発な活動にさえ似ていたかもしれない。

そうした、収集を付けたくともそう簡単につけられそうにない状況の中、聖歴1000年3月、ガドリア軍は4万の兵力を率いてイーリオス州を目指した。そして、この戦争の趨勢を決める出会い、そしてその後の世界の運命を決める出会いが起こることになる。場所はイーリオス州の東北の町、ディレスタでのことだった

—10時23分—

その日の空は、非常に雲がぶ厚かった。

おそらくこのまま雲が発達すれば積乱雲に発展するかもしれないほどに感じられる。だが、雲の上は当然快晴で、青い空がどこまでも続いている。眼下の地上では、人間同士が戦っていることなど、この世界の小さな出来事として忘れ去ってしまいたいほどだ。

青い空と地上の間に広がるぶ厚い雲は、まるで白い絨毯だ。そしてその絨毯の上を、3匹のドラゴンが、それ1人ずつ人間をその背に乗せていた。雲の凹凸にそって飛ぶその3匹は、本来であれば非常に希少な魔物であったし、そもそも人間を背中に乗せて飛ぶような性格をしているはずがない。本来ドラゴンは気性が荒い魔物であり、人間など乗せて飛び回る様なことはせず、寧ろその背に乗った人間を食らいつくしてしまうはずであった。

だが、ドラゴンは人間に従順であった。人間に無理矢理飛ばされているわけではなく、ドラゴンたちは自分たちの意思で飛行している。そして、その3匹の先頭を飛ぶドラゴンの背に乗る男性が、右手親指と人差し指を首に、正確には、首に装着している物に触れた。

「AWACS、状況報告を」

『此方AWACSドラゴンアイ。ディレスタ上空は雲が低い。両軍の戦闘は市街地で継続中』

それは無線通信によるものだった。3匹のドラゴンの後方60キロの地点に浮かぶ飛行船。それは上空から部隊を指揮するために設けられた空中管制船と呼ばれるものだった。

通常、指揮官は地上で兵士たちを指揮統括する。これまではそれが当然だと思われていたが、この空中管制船を運用しているクルザンド王統国軍では考え方が違っていた。というのも、陸上から状況

を判断して友軍部隊に情報を伝達するのは非常に困難だからだ。無線も障害物があれば届かず、かといって伝令は時間がかかる上に敵に捕らえられたりあるいは敵の流れ弾に撃たれて死亡するケースも多い。特に兵力数の劣るクルザンド王統国軍では部隊間連携が特に重要になる。少しでもタイムロスをなくし、なおかつ正確な情報を伝達させるためには、飛行船の運用が必須だったのだ。

無論、飛行船の運用にはデメリットもある。それは飛行船が兵器としてはあまりにも脆弱なものだということだ。少しでも炎上するような事態が発生すれば、飛行船は大爆発を起こす。しかも地上から容易に撃墜できることから、飛行船は軍用に適さないと判断されてこれまでこの国も使わなかったのだ。逆に言えば、容易に撃墜されてしまうというデメリットを無視してでも導入を決めたクルザンド王統国軍側の厳しい状況を浮き彫りにしてしまう物かもしれない。

だが、前線に投入するのではなく、後方で指揮官が指示を出すために用いるのであれば、寧ろ飛行船は最適の兵器と言えた。そしてこの時、空中管制船ドラゴンアイの機内では、地上軍と空を飛ぶドラゴンに乗る兵士の情報がリアルタイムで把握できていた。

『再度、作戦を確認する。諸君らは敵軍後方に強襲空挺を行い、敵野戦砲を撃破することが任務だ。他には目もくれるな』

「ラジャー」

先頭を飛ぶドラゴンに乗る兵士は非常に若かった。年齢からすれば、まだ20歳にも達していない。その兵士は状況をしっかりと把握し、後方の2人にも指示を出す。そしてその2人は女性で、また2人とも男性兵士と同年代に見えた。

だが、この若い3人の兵士が、実はクルザンド運の特殊作戦群に所属しているということを知れば、ガドリア軍はついに人材の枯渇

が特殊部隊にまで及んだかと呆れてしまうかもしれない。だが、それが事実であった。唯一ガドリア軍がこの若い兵士たちを見て勘違いするであろうことは、彼らには実戦経験があまりないと思い込んでしまうことかもしれない。だが、この3人は前線での戦闘経験を5年以上積んだ精鋭であったのだ。

「そろそろ効果地点に到達するな……2人とも、準備はいいな？」

『いつでもどうぞ、少尉』

『同じくいけます』

凜とした声と、やや淡いおっとりした声が男性兵士の耳に届いた。2人を見てうなずいたこの若い兵士は、ドラゴンアイに報告する。

「ファントムよりドラゴンアイ。これより突入を開始する」

『了解。ラファールの姿を敵に見られないようにしてくれ』

「了解。行くぞ！」

ドラゴン3体が左側に大きく傾き、そして一気に急降下する。低い雲の中に飛び込み、そしてそこから抜けるとすぐに地面だ。ドラゴンはずぐに水平飛行に戻る。

3人は町の建築物を遮蔽物として、敵軍に接近していく。砲撃音が響き渡る中、その砲声ができる方に向けてドラゴンたちは建造物の間を飛ぶのだ。そしてある程度接近してから、ドラゴンは急停止して地面に3人を降ろす。ドラゴンたちの存在を敵に見せるわけにはいかないため、ここからは徒歩だ。

「此方ファントム。降下完了した。位置はディレスタの南東だ。敵砲兵の現在位置は？」

『そこから北東1キロの地点だ。兵力は不明』

「了解。デラ、リン。行くぞ」

青年は2人の名を呼んで右手で合図する。2人の兵士はそれにしたがって、周囲を警戒しながら彼の後に続いた。

黒い長髪と緑色の瞳が特徴的なデライラ・フランスベルク准尉と、髪の毛を襟もとで切りそろえてまとめて束ねている黒い瞳のリン・グレーファ准尉、そしてこの2人を率いる立場にいる、銀髪でヒスイ色の瞳を持ったセネル・クーリッジ・ケラーマン少尉。この3人が、今回の作戦の中核隊員だった。面白いことに、この3人のうち、1人は国籍が違う。セネルとリンはクルザンド人だが、デライラだけはベルカ国籍、つまり傭兵だったのだ。

通常、多国籍の傭兵を特殊作戦群に加えるようなことはしない。だが、クルザンド王統国ではむしろ積極的に外国人傭兵を自国軍の特殊部隊に加えていた。これは、クルザンド王統国軍が傭兵によって前線を支え続けていることの裏返しでもあった。自国の兵士は前線勤務よりも後方の兵站維持などの任務に対応し、前線投入される数は決して多くない。戦後のことを見据えて、極力自国民の犠牲者を減らそうというクルザンド側の戦略思想だ。

そうした傭兵の多いクルザンド軍で、だが前線兵士の平均年齢の極端な低下は顕著だった。3人とも17歳で、本来であれば前線に投入するのではなく、後方で訓練などをしている年齢だ。だが、セネルとリンは12歳から、デライラは14歳の時から戦場を経験している。17歳という年齢は、実はこの戦争に限って言えば若い兵士とは言えない熟練した兵士だ。そして彼らはその熟練した兵士らしく、1キロの距離を、敵に出くわすことなく移動しきって見せた。

「……珍しいな」

セネルが敵の砲兵陣地を観察する。双眼鏡で見ると、どうも敵の護衛の中に女性が混ざっているように見える。

クルザンド軍では、才能さえあれば男性だろうが女性だろうが構わず前線に投入するが、ガドリア軍では女性を前線に送り込むことはまずない。前線の戦いは男性ものものだという風潮がいまだに残っているからだ。だからガドリア軍で女性が、後方の陣地とはいえ前線にいるのは珍しいことだ。

「……とはいえ、あの砲は潰さないとな。行くぞ」

セネルがトレンチコートの中から6本のスロージョーグナイフを、両手の指の間に挟むように取り出し、そして敵兵に向けその全てを投げた。投げられたナイフは、カルバリン砲という大砲に砲弾を込めようとした兵士と、それらを護衛する兵士の首に当たる。喉を貫き、頸動脈を切り裂いた。6人を一瞬で片づけ、それを合図としたように3人が残る敵兵に向けて突進する。

「敵！？　どこから！？」

ガドリア兵の1人が驚き、それに対してセネルは再びナイフを投げた。恐ろしいほどの唸りを上げてナイフが敵兵の右目を貫く。勢いが強すぎて、右目から後頭部にナイフが飛び出して貫いたほどだ。続いてナイフを投げる、ということはセネルはしない。すでにナイフを投げて攻撃するような間合いではなくなっていたからだ。

セネルは両手に大型のナイフ、リンは鉄棍、そしてデライラはレイピアを手にとって敵兵を攻撃する。ガドリア兵も剣を抜いて詰め寄ってきて、セネルに向け剣を振り下ろした。

彼はそれをまともに受けるような真似はしなかった。彼の銀髪が数本宙に舞う程度で、彼はそれを躲したのだ。ガドリア兵は勢いよく剣を振ったために重心が前のめりになってしまう。セネルはその隙を見逃さず、相手の首にナイフを突き入れる。

突き入れられたナイフは、首を貫通し、続いて水平に流れた。敵の首に差し込まれていたナイフが自由になり、別の敵兵に向けられる。相手はやや離れた位置に降り、少なくともナイフは届かない、はずだった。

「魔神拳！」

セネルの右拳が唸りを挙げながら振り上げられると、突然衝撃波が現れて、それがガドリア兵を襲う。甲冑に直撃し、しかもそれを容易に砕いた。ガドリア兵がもんどりうって仰向けに倒れて、上半身を起こそうとしたとき、すでにセネルは間合いを詰め、ナイフを首に突き刺した。

慈悲のない攻撃は、同時にカルバリン砲を扱う兵士たちをひるませる。護衛の兵はともかく、砲兵というのは白兵戦に慣れていない。つまり、護衛の兵を圧倒するほどの敵兵あが現れたと知れば、彼らは砲を捨てて逃げるしかない。砲兵に白兵戦を得意とする相手と叩けというのはあまりにも無謀だ。

セネルはその事をよく知っていた。だから彼は敵兵をあえて残酷に、そして圧倒的な力の差があると見えるようにして斃していく。そうすれば、最終的に彼らが手を下す相手の数は少なくなるだろう。彼はそう考えたのだ。

だが、彼自身、敵の戦力を完全に読み切っているわけではない。突然、彼の左手側から剣が襲いかかってきたのだ。彼はそれを紙一重で回避する。その剣を振ってきたのは、先ほど見かけた黒髪の女性騎士だった。驚くほどの俊敏なのは、ふつう騎士がに身にまとっている鎧をあえて着用せず、その分素早く動き回れるようにした、

特徴的な装備によるものだろう。

「成程……」

セネルはどうして、この女性騎士が前線にいるのか理解した。この女性騎士はかなり腕が立つ。男性は全身に甲冑を身にまとい、この女性は身にまとい、その剣の素早さによって防御を行っている。だがそれ以上に驚きなのは、その若さだ。自分たちと同年代に見える。もし女性がいても、さすがに自分たちと同じ年代の女性騎士がいるなんて思わなかったのだ。先ほどは遠目だったため、女性とわかってそれ以上は分からなかったから。

だが、自分と同年代だからと言って手加減する必要を彼は認めない。というよりも、相手にしようとしなかった。セネルは一瞬その女性に突進するように見せて相手を構えさせる。だが、そのままセネルは彼女の脇をすり抜け、カルバリン砲に突っ込んだのだ。

「させるか！ 魔神剣！」

セネルの背後から轟音が聞こえ、セネルは反射的に横に跳ぶ。先ほどまでセネルがいた場所を、彼が放つ魔神券と同様の衝撃波が突き抜けた。

「よりによって爪術士かよ……」

セネルが思わず呟く。爪術士、それは非常に数が少ないが、戦闘などで非常に有利な能力を持つ人間のことを言う。その力を使うときには指先が眩く光ることから爪術士という通称を付けられている。セネルもリンもデライラも爪術士だが、まさかあの女性騎士まで爪術士とは予想外だった。

爪術士を相手に背後を見せるのは危険だった。だが、その女性騎

士とセネルの間に、デライラが割り込んだ。まだリンは敵と戦っている最中でこっちに来るだけの余裕はない。

「すまんが頼む」

「了解」

デライラの返事を聞いて、セネルは素早くカルバリン砲に迫る。すでに砲兵は逃げ出して、そこにあるのは動かしやうのないカルバリン砲だけだった。セネルはその砲身を、なんとナイフで両断してしまったのだ。カルバリン砲は砲身を完全に破壊してしまえば再利用することはできない。運ぶ時の車輪や台座を破壊したところすぐに修理されてしまうが、砲身はそういうわけにはいかないのだ。

カルバリン砲がすべて両断されて、セネルはデライラの方を見た。そちらの方ではすでに決着がついており、剣を弾き飛ばされ、デライラが相手の首過ぎにレイピアを添えている。もし少しでも不穏な動きをすれば即座に突き刺す構えだ。なのだが、どうもデライラは困っているように見える。相手の女性騎士が、この状況でやけに堂々としているからだ。

「えーと……観念しない？」

「断る！ 私を討つなら早く討て」

「あのー……少尉、どうしましょう？」

「……はあ。お前が守る対象はもうなくなったんだ、諦めて降参しろ」

「うっ……むう……」

セネルは呆れた。どうも、彼女は殺されたがっているというより、この状況に追い込んで自分を殺そうとしない此方を不思議に思っている節がある。こちらとしては敵の砲兵をつぶしたことで任務は完了しているから、必要以上に敵を殺める必要はない。第一、武器を失った騎士を相手にしているほどの暇はない。

「デラ、さっさとここから逃げるぞ。彼女は放っておけ」

「了解」

デライラはレイピアを下げ、自分の鞘に入れる。だが女性騎士は余計に混乱した。

「お、お前たちは我がガドリア兵を必ず殺すのではないのか？」

「……どうしてそうなる」

「だ、だって騎士学校では……」

一体ガドリアの騎士学校ではどんな教育をしているんだと思わずセネルは問い詰めたくなった。敵国だし、多少屈折したことを教えているだろうとは思っていたのだが、まさか捕虜を取らずに皆殺しにしているという風に教えられているとは心外だ。

セネルがやや呆れ顔で、デライラの方に接近する。だが次の瞬間、彼はその足を止めた。

「少尉？」

「野郎……リン、こっちにこい！ デラは氷を張れ！」

セネルに言われ、リンが残った敵兵を吹き飛ばしてこっちに走ってくる。女性騎士は何が起ったのかまるで分からない。分かるのは、先ほどまで自分の首筋にレイピアを突き付けていた少女が、レイピアを鞘から引き抜いて地面に刺し、そして3人の敵と、彼女自身を氷の壁で包み込んだということだけだ。

氷の壁が、前後左右どころか頭上まで覆い隠してしまう。刹那、彼女は不気味な風切り音を聞いた。訳が分からず、だが彼女は、鉄棍をふるっていた女性に自分の頭を抱えられた。

「な、何を――」

「いいから伏せて！」

少女の言葉の最後に爆発音が重なった。少女はなぜ、この3人が氷を張り、固まったのか理解した。この銀髪の青年が砲撃音を聞き、すぐに防御態勢を取ったのだ。数発の砲弾が周囲に着弾し、耳をつんざくような砲声が響き渡る。

「……落ち着きましたね」

「くそ、敵主力からの砲撃か。これ以上ここにいたら死ぬな」

少々無駄に長居をしてしまったらしい。セネルはそう感じ、2人に大急ぎでこの場を離れるように指示を出す。氷が割れ、3人あ一斉に走り出す直前、女性騎士が3人に声をかけた。

「何故私を助けた？」

「たまたま近くにいたからだ」

これはまったくの事実なので、セネルとしてはどうでもいい言いたげな表情で言った。そんなことよりも、まずはこの場から逃げなければならぬ。恐らくガドリア軍は味方が全滅したという風に思い込んで、続けて砲撃してくるだろう。

「お前も早く逃げろ。死にたくなければな」

「お、お前とか言うな！ 私はクロエ・ヴァレンスだ！」

「ヴァレンス？ あのヴァレンスか？」

「そ、そうだが……」

セネルが驚いたような表情を見せる。クロエ・ヴァレンスと名乗った少女は、どうやら自分、というより自分の家の名前を相手が知っているということに気が付いた。ただ、セネルの視線は、どちらかというとうろくして、という風な疑問の表情に近かっただろう。だがそれもすぐに、消える。

「じゃあクロエ、早く東に逃げろ。味方の砲撃で吹き飛ばされたくないければな」

そう言って、セネルは足早にその場を後にする。クロエ・ヴァレンスはやや不満顔で、だが敵兵の言うとおりに、その場から逃げることを選ばざるを得なかった。

これが、まさか今後の歴史に大きく関与することになる2人の、初めての出会いであろうとは、この時2人は思いもしなかった……。

―第2話―（前書き）

ガドリア軍前衛部隊を撃破クルザンド軍は、続いて現れるガドリア軍主力部隊に対抗するために次の作戦を準備する。一方のガドリア軍は、前衛軍壊滅を受け、主力部隊の前線投入を決めた。それは、両軍の決戦前夜の光景であった。

―第2話―

―聖歴1000年3月15日―

―クルザンド王統国　イーリオス州　レウルーラ―

―17時11分―

……クルザンド王統国軍の前線司令部は、イーリオス州の州都、レウルーラに設置されている。

かつてレウルーラは、ガドリア王国がイーリオス州を自国領土としていた時に州の中心地として運用していた都市である。クルザンド軍が聖歴995年にイーリオス州を奪還した後、彼らはそのままレウルーラを州都として扱っていた。敵国の真似をしたのではない。地理上の問題、また交通網の発達具合からも、レウルーラ以外に州都に相応しい都市はなかったのだ。

そのレウルーラの中心部に存在するグラシル・ホテルは現在、クルザンド軍の前線司令部として機能している。地下3階に設けられている作戦室では、現在前線となっているディレスタ方面の戦況が刻一刻と伝えられていく。

「ガドリア軍先鋒は後退を開始した模様」

「本当か？　確認しろ」

「第21師団より確認済みとの報告です」

その報告は、前哨戦はどうかクルザンド軍が勝利したことを意味する。とはいえ、この程度の勝利に浮かれている暇などない。追加情報として、ガドリア軍の主力部隊が徐々に接近してくるという。今日中に攻め込んでくる、という可能性はないとみられるが、少

なくとも、1個師団程度では防ぐことができないほどの規模であるという。

どうやら本格的なイーリオス州制圧部隊を送り込んできたようだ。報告を受け、多くの兵士たちは、指令座に座る人物に視線を送る。

その人物の名は、ディトリッヒ・ケラーマン大佐という人物で、彼はクルザンド軍の前線軍総司令官という立場にある。だが、彼は本来この国の人間でもなければ、階級で考えれば前線総司令官など務めることができないはずであった。

ケラーマンはもともベルカ人で、クルザンドには軍の兵員強化のために招かれた。それは聖歴978年のことであり、ガドリアとの戦争が始まる前のことだ。本来であれば帰国すべきところであったが、ベルカ公国政府はそのまま彼を派遣することを決めた。

ベルカ公国は傭兵の派遣を国家事業として行っている。これはベルカ公国の軍、通称ベルカ騎士団が、平時であつても軍の練度を保ち続けるため、正規軍の兵士を実際の洗浄に送り続けていることと、外貨獲得の手段として傭兵派遣を行っているためだ。事実、クルザンドにはベルカ人傭兵が3万人も参加している。その全てが、ベルカでは正規軍の兵士だ。

ケラーマンの場合、教官職のままクルザンドに残ることになり、3年ほど経過してから実戦部隊の指揮を要請された。ケラーマンはベルカ軍の中でも優秀な指揮官として知られた人物であり、その作戦指揮能力は劣勢であったクルザンド軍にとって切望されたものだった。ケラーマンはその申し出を、多少の紆余曲折を設けながらも受諾した。

彼の最大の功績は、イーリオス州奪還戦であろう。彼はこの作戦の成功でクルザンド軍内部での地位を固め、現在の職に就いた。だが彼は大佐という階級以上のものを望まない。ベルカ人である彼が、クルザンドの軍階級で将官になればさまざまな弊害が出てしまうからだ。そのため、クルザンド国王ヒョードル・ボラドは、彼に特殊な権限を与えるという形でこの問題を解決している。

事実上脳総司令官という立場にあるケラーマンは、第21師団に、ディレスタの市民を護衛しつつれるルーラまで撤退するように命じる。ディレスタを事実上放棄する命令に、その場にいた将校たちは驚いた。

「ケラーマン大佐、我々は勝利しました。撤退の必要はないのではありますまいか？」

「現時点で勝っているだけで、戦略的には必ずしも勝ってはいない。勝つのであれば、敵をレウルーラまで引きずり込むことが先決だ」

レウルーラまで引きずり込む。それは、敵の主力部隊をこのレウルーラで撃滅するということであつた。ケラーマンは敵の補給線を限界まで、しかも急速に引き延ばしてしまふつもりなのだ。ディレスタを放棄するように前線部隊に命じたのも、その下準備のためだ。ケラーマン大佐の戦略は、その場での戦闘に固執するようなことではない。あくまでも大局を見て、そのうえで判断するものだ。

ケラーマンはひとまず、作戦司令室から彼自身のオフィスに戻ることにした。大量の書類が一斉に襲い掛かってくることになるので、それを作戦司令室で受け取るわけにはいかなかったからだ。

廊下に出ると、そこにはケラーマンの直属の部下である人物が彼を待っていた。身長2メートルを超えようかというその人物は、黒衣の野戦服を身にまとっている。これはクルザンド王統国軍特殊作戦群に属する兵士のみが着用を認められている特殊な服で、通常舞台にはい浴びされないような高性能の軍服ともいえる。

それを身にまとつるのは、クリューガー・ヴァインガード大尉という人物だ。46歳で大尉という階級は必ずしも彼が順調な出世街道を歩めなかった、というわけではない。彼は特殊部隊の実戦部隊の指揮官であるが、実戦部隊の指揮官階級の上限は大尉までだったのだ。最近になってようやく中佐までは現場での式を行えるようになった

が、それまで彼は9年間も昇進しておらず、この近い間に少佐への昇進を確実視されていた。

「クリューガー。ガドリア軍の砲兵を潰しに行った3人はどうなった？」

「現地に赴いていたGIN——国家憲兵即応部隊——の117戦隊より報告があり、3人の回収に成功したとのことですよ」

「そうか」

ケラーマンはそれだけを確認したかった。何しろ、その作戦には彼自身の養子が参加していたからだ。前線での実戦任務のために派遣されていたGINが3人を回収したのは、もともとそのためGINが派遣されていたのだ。

GINは、国家憲兵即応部隊という軍警察組織だが、所属そのものは特殊作戦群である第1戦略強襲軍団に属する。軍警察と呼ばれる組織そのものがまだ作られて間もなく、憲兵隊の特殊部隊なのかどうかの線引きが曖昧であるための処置だった。そしてケラーマンは、この第1戦略強襲軍団に対して出動要請権限を有する国王以外の人物でもあった。

「少々権限を使いすぎたか？」

「問題ないでしょう。117戦隊のフレデリック大尉も、実戦訓練の延長とっているようです」

ケラーマンは頷いた。敵の大部隊から逃げてきた3人を回収するというのが、実戦訓練感覚で行えるような連中なのだ。実のところ、彼のすぐ後ろに控えるように歩いているこの巨人ならば、おそらく

遊び感覚で同じことができるだろう。

ケラーマンの執務室に到着すると、ケラーマンは椅子に腰かける。彼のデスクの上にはいくつかの書類が散乱していて、この後さらに複数の書類がこのデスクの上を埋めるだろう。まだ前哨戦ではあるが、それでも先頭の事後処理とは大変なものだ。

「ところで大佐、今後の作戦方針は？」

「聞きたいかね？ 大尉」

「おおよそ、予想はついてます。レウルーラを一度放棄するつもりでしょう」

他者が聞けば、自分の耳を疑わざるを得ないことをクリューガーは言っただけだ。彼はケラーマンがこのイーリオス州の州都、レウルーラを敵に明け渡すであろうことを、予測していたのである。それに対し、ケラーマンは首肯した。

「よく、わかったな」

「大佐とは長い付き合いですので」

クリューガーはにやりと笑う。

「ですが、オーレッドの事務屋どもは納得しますかね？」

「敵に与えるのは2日ほどだ。すぐに返してもらおう」

「ガドリア軍が聞いたら憤慨しそうですね」

それに対し、ケラーマンはやや苦笑しただけで、すぐに別の話を切り出した。彼にとっては、レウルーラを放棄しての作戦はすでに決定事項であり、またよほどの不確定要素がない限りは成功する自信もある。それよりも、彼は別のことが気になっていたのだ。

「エストバキアより新しく来るパステルナーク少佐は、来週到着するのだったな」

「ええ。今頃はセレス海の洋上でしょう。エストバキアきつてのエースです。インヴィンシブル隊にとってはありがたい戦力強化になるでしょう」

クリューガーが率いる部隊は、インヴィンシブルと呼ばれる非正規戦部隊だ。ディレスタで敵砲兵を撃破したセネルたちも、このインヴィンシブル隊に属する。

この部隊は各国傭兵の中でも特に優れた人員を集めた部隊だ。当初はクルザンドとベルカ、そしてエストバキアの3カ国の傭兵を主軸に構成されていたが、人員損耗と兵員補充のために、現在では非常に多くの国籍バリエーションを備えている。何しろガドリア国籍の兵士までいるほどだ。

「彼に関してはヴォイチェク大尉に一任してあります。私はそれほど関与しません」

「成程……その件は了解した」

「他には何か？」

「いや、今のところはない。ご苦労だった」

そういつてクリューガーをさがらせる。ケラーマンはクリューガーが執務室から出たのを見た後、軽く目頭を押さえた。彼と入れ替わるように、無数の書類が彼のもとに届けられ、彼の時間を容赦なく食いつぶすように思えたのだった。

— 聖歴1000年3月15日 —

— クルザンド王統国 イーリオス州 ルート212 —

— 20時31分 —

セネルとデライラ、そしてリンの3人は、GIN117戦隊の馬車に揺られながらレウルーラを目指している。この日の空は雲が厚いために夜空からの光は地上に届かず、馬車はそれぞれの馬車同士の灯りによって互いの位置を確認していた。

この日の戦闘が終わり、戦闘の結果だけはクルザンドの勝利だったが、すでに現地で戦闘を行っていた第21師団には撤退命令が下されていた。数多くの兵士たちが、自分たちは勝ったとはずなのに撤退を命じられたことに納得できないながらも命令に従って南西の方角に向かって歩いていく。馬車の多くは負傷兵か、セネルたちのような特殊作戦群の兵士を乗せて先に進んでいた。

「思ったよりは楽でしたね」

「そう思っていると、次からは危険だぞ」

デライラの発言に対し、セネルが苦笑したように言う。今回の運が良かった結果に過ぎないし、敵の砲撃音が偶然聞こえたからこそ生きているようなものだ。もし砲撃音が聞こえていなかったら、あるいは聞こえたとしても遅れて聞こえていたら、今頃3人とも死んでいただろう。

自分たちがしていることは綱渡りの仕事だ。一步間違えば、そこには確実な死が待っている。だからこそ油断できない。油断はそのまま死につながるものだ。

「それにしても、今日は珍しいこともあるものね」

「何がだ？ リン」

「いえ、ガドリア軍に女性がいたのもですけど、まさかそれがヴァレンスとは思いませんでした」

「あ、そういえばそうだった。って言うか、ヴァレンス家は当主が戦死して取り潰されたと思ってました」

「勝手に潰すな。確かに当主のケネス・ヴァレンスは5年前に死んだはずだが、家自体は残ってたはずだ」

そう、クルザンド軍が行ったイーリオス州奪還戦の際に、当時ガドリア軍騎士団長だったケネス・ヴァレンスは、クルザンド軍の傭兵部隊によって討ち取られている。ガドリア側は、ケネス・ヴァレンスの死に対して敵に包囲されて獅子奮迅の活躍をしたものの、あえなく最期を迎えたという事になっているようだが、実際にはこちらの傭兵に一騎打ちを挑まれて討ち取られたという。

大抵の場合、貴族の当主が死んだら跡取りがすぐに継がなければ

その貴族の家は取り潰されることになる。貴族は同時に特権階級であるから、国側の本音としては少ない方が有難い。クルザンドとガドリアの20年にわたる戦争で、ガドリア貴族は既に100以上の貴族が取り潰されているという。

ヴァレンス家も取り潰しにされていて不思議ではなかった。ケネス・ヴァレンスには娘が1人居て、男子はいなかったのだ。しかも娘はいずれ竹に嫁がせようと箱入り娘として育てられており、とても騎士の目池の跡取りにはなりえない、と思われていたのだが、どうやらそうではないようだ。

「ガドリアで女性が騎士に慣れた例ってありましたっけ？」

「確か……6年前に1人だけだから、あのクロエっていうのが2人目だろう……多分」

セネルは記憶を掘り出してみるが、どうも確証を持ってないといった様子だった。ガドリア軍に関してはある程度知っている身ではあるが、徹底的に調べ上げたというわけではない。彼は戦史研究家のように調べる身ではなく、調べられる側の人間なのだ。

とはいえ、気にならないと言えば嘘になる。あれ程剣を使えるところを見ると、相当量の鍛錬を積んできたのだろう。箱入り娘でしかなかったと聞いていたから、血反吐を吐くほどのものだったに違いない。それに、セネルにはヴァレンス家に対して、多少なりとも関係がある身だ。あまり良い関係とは言えない物ではあるが。

「……ケラーマン少尉、何考えてるんです？」

「……いや、大したことじゃない」

「嘘ですね」

リンがあっさりと断言し、セネルは思わず目を瞬かせた。

「アレス村のこと、考えてませんでした？」

「……………」

セネルは小さくため息を漏らした。この2人は、どうも人の心を読むのがうまい。

「少しはな。でも、それは過ぎたことだ。今更蒸し返す気はない」

「それがケラーマン大佐の教えですもんね」

「まあな……………」

そう、養父は戦い続けるにあたって、セネルに大事なことを教えてくれた。それは今の彼にとって何よりも大事なことになる。自分が道を踏み外さないでいられるのもその教えのおかげだ。

セネルはこの話を打ち切った。これ以上ヴァレンス家に関する話をする、ひたすらややこしくなりそうで面倒だったのだ。セネルは寝るといい、毛布を自分の体に掛けて丸まった。

「…………少尉って、よくこんなに揺れる馬車で寝れるわね」

「疲れてるんだと思う。静かにしてあげなきゃ」

リンとデライラが小声で話す。セネルはその時すでに夢の中であり、小さな寝息だけがかすかに風に乗って、2人の耳に届くのだった。

—聖歴1000年3月15日—
—聖ガドリア王国　チャールズ侯爵領　ガドリア軍集合地点—
—21時42分—

「つまり、前衛の話が軍は敵に敗北したという事だな」

「はっ……前衛軍を率いておられたホランド伯爵は戦場より離脱することに成功いたしました」

ガドリア軍はその夜、ようやく入手した情報に関しての軍議を行っている。クルザンド軍が無線などを使用して情報伝達を円滑化しているのに対し、いまだにガドリア軍では伝令を使用しているの情伝達だった故である。

そもそも、無線技術に関しては開発したベルカ連邦がクルザンドとエストバキアにしか、その技術情報を開示していなかったのだ。そのため、無線という存在は知っていても、それを使うことができなかった。何より100年以上の昔、敵対していたオーシア連邦系の国家であるベルカ公国の技術を使うこと自体、彼らには拒まれることだったのだ。

だが、少なくとも彼らは今日クルザンド軍に敗北したという事実を認めざるを得なかった。前衛軍を弑していたホランド伯爵は、戦場からは脱出することには成功したが、そのあとの消息が分かって

いない。前衛軍8000名も3000名が戦死して、2000名が敵に捕らえられたらしい。ただ敵に捕虜にされてしまった兵に関しては実態が分からないために実質的には戦死扱いだ。

軍議では、今後の軍の方針について討議がなされる。前衛軍が敗北し、壊滅した事実に関しては、士気に影響するために伏せることとし、明朝全軍を以てディレスタに向けて進撃し、ディレスタにいる敵軍を撃破する。これは同時に、ガドリア軍はクルザンド軍が既にディレスタから撤収していることを知らないという事実を如実に物語っていた。

クロエ・ヴァレンスはこの軍議には参加していない。一介の騎士でしかない彼女に、指揮官きゅばかりがそろそろ軍議に参加する資格自体がなかった。だが、その一方で彼女に対していくつか調書が行われていた。

クロエは前衛軍に加わって、そして生還してきた兵士である。普通であれば、残存兵を再編して主力部隊に加えるところであるが、敗戦の事実を伏せるため、彼女たちはこの場にいないことになっていたのである。特にクロエの場合、どうも敵兵に助けられたらしいという目撃証言があり、何があったのか尋問されたのだ。

「では、敵兵は貴公に何もしなかったと」

「武器を奪われ、戦えなくはされました」

「よくその程度で済んだものだな。クルザンドの男は見境がないと思っていたが」

「相手は女性でした」

「ふむ……」

クロエは、調書を取る騎士が面白くなさそうな表情になっていることに気が付いた。相手側にとって、自分の意に沿わないことを喋るクロエが何とも面白くないのだろう。

彼女自身はガドリアでは唯一の女性騎士だ。それは同時に、この軍隊社会では差別の対象にされる。戦場は男性のものであり、女性がいざしり出てよい場ではないと考えている者が意外と多いのだ。その時、1人の男性騎士がその場に現れる。調書を取っていた騎士が思わず敬礼した。

「調書は終わったか？」

「は……ある程度は……」

「ではヴァレンスを引き渡してくれ。彼女を第2騎士団に編入する」

「し、しかし……了解しました」

騎士はということだと言いたげだが、クロエを連れ出した人物は、その騎士よりも遥かに高い地位にいる人間だった。

「助かりました、バウリスク騎士団長」

「気にするな。お前を私の隊に編入するのは事実だからな」

第2騎士団騎士団長トーマ・バウリスクは苦笑する。クロエにとって、バウリスクは恩人のような人物だ。彼女を騎士に推挙して騎士に叙させてやったのも彼であり、同時に平民出として初めて、騎士団長の地位に就いた人物としてクロエは尊敬している。

彼が率いる第2騎士団は、ガドリア軍にある7つの騎士団の1つだ。各騎士団には1万人から1万5000人の騎士がおり、その下

部組織のような形で歩兵団が存在する。ガドリアでは騎士団には貴族、歩兵団には平民という形で所属が分けられており、ガドリアの階級格差を象徴する組織構成ともいえた。

「しかし意外でした。恐らく明日の進軍からは外されると思っていたので」

「実際、半分の兵は戦闘に参加できん。ヴァレンスの場合は俺が頼んだからな」

「どうしてですか？」

「お前さんの場合、早く手柄を立てないとまずいからな」

「……………」

そういわれてクロエは唇をきゅっと噛み締めた。クロエは騎士に叙任されている身だが、ヴァレンス家の騎士としてまだ認められたわけではない。少しでも多くの武勲を立て、早くヴァレンス家の騎士であり、当主であることを認めてもらえなければ、ヴァレンス家という騎士の家は取り潰されてしまうことになるのだ。

バウリスクは、ケネス・ヴァレンスの部下であったこともあり、その娘であるクロエには何かと尽くしてきた。クロエの父が死んでからというもの、バウリスクとケネスの弟子である女性騎士の尽力がなければ、すでにヴァレンス家は取り潰されていたことであろう。だが、一度クロエが騎士に叙任されてしまえば、あとは彼女に武勲を立てるための場所を提供することしかできない。実際に武勲を立てられるかどうかは彼女の力量次第なのだ。

ただ、今回の件でクロエが責任を問われるところだったのは何とか回避することができた。もし責任を取らされていたら、クロエは

前線に戻ることはできなかったに違いない。

「ところでヴァレンス。砲兵部隊を襲った敵というのは、どうも通常のクルザンド軍部隊ではなかったというが、本当か？」

バウリスクは不意に話題を変えた。いきなり話題を変えられたことにクロエは戸惑ったが、質問に対してはすぐに首肯した。

「はい。クルザンド軍は、多くが茶色い服を身にとっている筈なんです、襲撃してきた敵は全身黒でした」

「全身黒衣の部隊か……おそらくクルザンド軍の精鋭部隊だろうが、名乗ったりしたか？」

クロエは首を横に振った。

「いえ、名乗りはしませんでした、相手の特徴は覚えてます」

「そうか。恐らく、この戦いにまた現れる事になるだろうな。用心しろ」

そう言い、バウリスクはクロエの肩をたたいて彼女から離れる。騎士団長の仕事は数多く、自分の部下とはいえ、1人にいつまでも構っているわけにはいかなかったのだ。クロエの方はどうかと言え、自分の武器が置かれているテントの方に戻っていく。

そのテントは、クロエしか使っていないテントだ。最前線に女性がクロエだけという事もあり、また軍の規律上の関係から、クロエには専用の備品が与えられている。ガドリア軍が男性ばかりで女性が入り込みにくいというのは、実はこうした実務的な問題も絡んでいるのだ。その根底にあるのは、男尊女卑であることは間違いない

が。

クロエは自分の剣を見る。今日、この剣は自分の手から弾き飛ばされてしまった。あのための砲撃でも残された剣だ。だが、この件がいかにも幸運でも、今日相手に情けをかけてもらっていないければ、今頃クロエの首は胴体から切り離され、敵に持ち帰られていたことだろう。そのような失態を、繰り返すわけにはいかなかった。

「もし、あの敵を見たら、今度こそは勝利してみせる……」

勝てるかどうかわからない。だが、少なくとも負けるわけにはいかなかった。ヴァレンス家のためにも、自分自身の名誉のためにも。明日、ガドリア軍主力部隊はクルザンド領に進撃する。そこで必ず武勲を挙げる。クロエはそれだけを、ただひたすら願うかのよう
に、剣の腹に唇を落としたのだった。

―第3話―（前書き）

第2話の続きです。戦闘シーンなどは次からです。

―第3話―

―聖歴1000年3月16日―

―クルザンド王統国　イーリオス州　ディレスタ―

―12時30分―

敵影見当たらず、すでに撤退したものと認む。

斥候部隊からこのような報告があり、ガドリア軍上層部はクルザンド軍側の意図が読めずに混乱し、全軍の進撃を停めていた。

チャールズ侯爵領から進発したガドリア軍は、情報収集の斥候部隊と思われる敵を除けば、敵部隊に全く出くわしていなかった。敵の斥候は遠目からこちらの動きを観察するとすぐに逃げ出して、その情報を恐らくはレウルーラに届けている。そこまではガドリア軍も容易に想像できることなのだが、イーリオス州の東北に位置し、最前線ともいえるディレスタからクルザンド軍が撤収してしまっていることまでは流石に想像できなかったのだ。

ガドリア軍は当初、クルザンド軍はディレスタ周辺で決戦を挑んでくると考え、第2騎士団と第3騎士団を前面に押し出し、野戦に備えていたのだが、それが見事に空振りに終わった。ディレスタを無血開城できたことは喜ばしいことだという意見があったのだが、いざディレスタの町の中に入り込んでみれば、そこには人もいなければ物資もないゴーストタウン状態だったのだ。

ガドリア軍は困惑した。ここまで徹底的に撤収を行っているところを見ると、少なくとも昨日、ガドリア軍の先鋒部隊が配送してからすぐに敵も、ディレスタの住民を連れて撤収したことになる。計画に敵に、しかも電撃的な撤収は、ガドリア軍に追撃の余地を与えないだけでなく、ここからさらに進撃すれば、何か恐ろしい罠に嵌ってしまったのではないかという危惧を抱かせる。5年前、ガドリア軍はイーリオス州の西にある、クルザンドエリシオン州に侵攻し

ようにしたときにも、クルザンド軍は最後の最後まで姿を現さずに大部隊をガドリア軍主力の後方に展開して包囲殲滅に追い込んだことがある。その時の記憶が鮮明であるだけに、ガドリア軍は慎重にならざるを得なかった。

騎兵部隊による偵察も、その慎重な行動の裏返しである。第2騎士団に偵察任務が命じられたとき、トーマ・バウリスク騎士団長は、彼が信頼しているサージ・ロンバルツ子爵に騎士団の半数を任せ、残り半数を自ら率い、二手に分かれて偵察行動を開始した。1万2000もの騎兵を、2つに分けたとはいえすべて動かすのは、敵地のど真ん中で兵力分散の愚を犯さないためだ。別働隊を任せたロンバルツ子爵には、敵部隊を確認した時にはすぐにディレスタまで退却するように命じてある。あくまでも偵察であって、無意味な戦端を開いて出血することは、バウリスクの望むところではなかった。

クロエはバウリスクの部隊に加わっている。彼女はこの偵察任務に関してそれほど強い関心を持っているわけではなかったが、ディレスタから敵軍が完全に消え去っていたことには興味を持った。どうして勝利した軍隊が撤退を選んだのか。その訳を知りたいのだ。それは、クロエはまだ、戦略というものをしっかりと理解していない証拠ともいえる。

不意に、先陣を走るバウリスクの馬が足を止めた。全騎兵に全身の停止を命じる。いったい何が起こったのかと言えば、どうも彼の視線の先に、数騎のクルザンド軍騎兵が居たらしい。

「あれも斥候のようだ。クルザンド軍は頻繁に斥候を出しているようだな」

ガドリア軍の動向に対して、クルザンド軍は過剰なまでに情報を集めている。おそらくクルザンド軍の作戦は、ガドリア軍の動きを完全に把握しておかないと実行不可能な作戦なのだろう。それだけ、敵も厳しい綱渡りをしていると見える。

クルザンド軍の騎兵部隊は、ガドリア軍部隊を見つけるとすぐに逃げ出した。ガドリア騎兵がそれを追撃しようとするが、それをバウリスクは制した。

「しかし、敵に此方の動きを悟られてしまいます」

「大丈夫だ。俺がこの数で動いているのは、なにも兵力分散を怖がっているだけじゃない」

バウリスクは不適な笑みを見せた。彼が大規模な部隊を動かしているのは、実は兵力分散を恐れていることだけでなく、敵に此方の動きを誤認させるためでもあった。クルザンド軍は6000もの騎兵を見つけて思うだろうか？ 少なくとも偵察部隊とは思わないだろう。偵察部隊にしては、この規模の騎兵部隊は明らかに数が多すぎる。今であったクルザンド軍の斥候部隊程度が、本来の偵察任務では適正な数だろう。

となれば、クルザンド軍はこちらの動きを見て悩む。はたしてこの騎兵を前面に出してきたとはなんなのか？ それが分からないと、クルザンド軍も安心はできない。まさかただの偵察行動とは敵も思わないから、クルザンド軍にとっては判断材料に困る素材が、自軍に運び込まれてしまい、どう調理すればよいのか考えざるを得ない。

「なんと、そのようなことを考えておられたのですか」

「まあな。もっとも、このやり方は、敵軍の知恵に学んだものだが……」

バウリスクは苦笑した。軍事における策略は、実は彼はあまり得意なことではない。彼は堂々と、軍をそろえて正攻法で戦うのが得

意な堅実な用兵家であり、奇策を用いるという分野には向かないのだ。だが、こと戦術面においては多少の策略にも頭を回さなければならぬ。それが何とも彼にとって悩ましい問題でもあった。

「それで、この後どうされますか？」

「そうだな。夕食前にはディレストタに一度戻るつもりだが、それまではもう少し前進する。クルザンド軍に、我々が攻撃してくると思わせてやることにしよう」

部下の質問に対し、バウリスクはそうのように答えた。クロエはそれを聞いて、もしかしたら武勲を得る機会が与えられるかもしれないと、それを望むかのように、鞘に納めた剣を見つめたのだった。

— 聖歴1000年3月16日 —

— クルザンド王統国 イーリオス州 レウルーラ —

— 14時48分 —

ガドリア軍騎兵部隊が2個部隊各6000騎ずつ存在し、西進しつつある。この情報を受けたとき、バウリスクの予想通り、クルザンド軍はその意図を読み取れなかった。

数騎での行動であれば、間違いなく偵察であるが、今回は敵の規

模がまりにも大きい。6000程度の数ならば、現在レウルーラに待機している5万の兵力を用いれば文字通り粉碎することも可能だろうが、敵主力がまだどのように動くのかもわからない段階で、自分の全部隊を動かすというのは、あまりにも危険な行為だ。

ケラーマン大佐は、敵の騎兵部隊の動きに関してより多くの情報を求めた。その結果、どうやらガドリア軍は、6000の騎兵をもう1部隊用意して、その部隊がまるで鼠花火のように走り回っていることが確認された。その動きも不規則で、猪のように悠然と突進しているかと思えば、此方の部隊を見たとたんに脱兎のごとく逃げ出している。だがその移動範囲は広大に見えて実は狭く、イーリオス州北東部を活発に動き回り、それ以上のことはしていないようだ。付近にある農村などにも目もくれておらず、ひたすら平原を駆け回っている。

「全く敵の意図が読めません。我々をおちよくっているのでしょうか？」

「そうは思えんな」

あまりに理解しがたい行動に、いら立ちを募らせる参謀に対し、ケラーマンは至極冷静だった。むしろ敵の行動が、不可解であっても直接攻撃を加える類のものではないことが分かっているれば、充分冷静に対処できる類のものだ。

おそらく偵察なのだろう。ケラーマンはそう考える。動きは活発で数も多いが、農村部に襲撃を仕掛けたりこちらの斥候部隊を攻撃しないのは、自軍の戦力を不用意に漸減しないようにしているからだろう。敵の指揮官は慎重で、無駄な戦闘はとことん嫌うタイプの人間であるらしい。そういった指揮官の人となり容易に想像でき、ケラーマンは冷笑寸前の苦笑を見せた。それは明らかに、自分に向けたものだった。

「大佐。どう対処されますか？」

「……レウルーラに2キロまで近づいたら、部隊を投入して迎撃しろ。ただし、追い払うだけでいい。無暗に戦うな」

それよりもやることに別にある。ケラーマンにとってはそっちの方が重要だった。何しろ今、レウルーラから市民と軍を脱出させている最中なのだ。いちいち敵軍に構っている暇などない。

レウルーラの住民は200万人。これをすべて西に脱出させ、そのうえで軍もすべてレウルーラから退去させる。残されるのは建造物だけという状況になってしまうために、非常時のために用意している部隊を除いてすべて出払っているのだ。これもケラーマンが考えている作戦のための布石だ。そしてこの作戦の肝は、もうすぐこのグラシル・ホテルに到着することになっている。そしてそれらが到着したとの報告が入ると、ケラーマンは司令室を参謀たちに任せ、彼自身はブリーフィングルームに向かったのである。ブリーフィングルームでは、7人の黒衣の兵士が彼を待っていた。

「クリューガー。そろっているか？」

「インヴィンシブル第4分隊、全員揃っています」

クリューガーはそう言って、眼前の6人を見た。その6人は、今回の作戦のかなめになる特殊作戦群に属する精鋭部隊、インヴィンシブル小隊の兵士だった。

第4分隊は分隊長グレン・ローガン中尉、副分隊長セネル・クリッジ・ケラーマン少尉をはじめとし、リン・グレーファ准尉、デライラ・フランズベルク准尉、フェルメン・ロイヤルロッド准尉、そしてレイラ・ストライカー准尉の6人で構成される。平均年齢に

して18歳と若い部隊ながらも数多くの実戦経験を積んだ精鋭であるが、それは戦場の低年齢化を如実に物語ることでもある。

分隊長であるグレン・ローガン中尉は19歳。特徴的である赤毛の長髪を首筋と腰回りで結っているのは、彼の民族の伝統を継承する為だった。彼はもともとガドリアで生まれ、少数民族であることを差別されぬために軍に入った。だが、彼は初陣で対訳する味方に置き去りにされ、クルザンド軍に捕らえられたのである。その後、味方である自分を見捨てたガドリア軍を見限り、クルザンド軍で栄達する道を選んだ。その選択は成功をおさめ、伍長から任官して4年で中尉にまで昇進した、クルザンド軍でも稀有な人物だった。

セネル・クーリッジ・ケラーマン少尉は17歳。そのファミリーネームの通り、彼はディトリッヒ・ケラーマンの養子である。彼はもともとイーリオス州アレス村という小さな漁村に生まれたのだが、その漁村はガドリア軍の攻撃を受けて壊滅した。その時、唯一生き残ったのがセネルであり、その身元引受人となったのはケラーマン大佐だった。銀髪と翡翠の瞳を持ち、世界的も数が少ないといわれる赤色人種という特徴を持っている。

リン・グレイファ准尉は17歳。彼女は本来であればクルザンド王統国首都オーレッドに生まれ、平凡な人生を歩むはずであったが、戦禍は有無を言わずに彼女を戦場に繰り出した。しかし、本当に平凡な人間であれば初陣で命を落としていたであろう局面で彼女は生き残り、その後も数多くの戦地を渡り歩いた。実はセネルとは初陣の所属部隊が同じで、その時の所属部隊の生き残りもまた、この1組だけだった。クルザンド人としては風防は一般的であるが、それだけに整った顔立ちには、自らを厳しく律する彼女を外見からあらわしているともいえる。

デライラ・フランズベルク准尉は17歳。彼女はベルカ騎士団から派遣された傭兵の1人である。彼女の家系自体は平凡な騎士の家計であるが、ベルカ騎士団における平凡と、他国騎士団における平凡は、その意味において大海を挟んで存在する浜辺と同じほどの距

離がある。一騎当千の騎兵しかないといわれるベルカ騎兵は、各国の軍人にとって尊崇と畏敬、そして恐怖の対象である。それだけに、ベルカ人傭兵がクルザンド軍に加わっている状況は、兵的劣勢であるはずのクルザンドガドリアと互角に戦っている現状を生み出した要因ともいえるだろう。比較的クルザンドに近いベルカ西部の都市ルーメンの生まれのためか、黒髪や黒い瞳などの身体的特徴はクルザンド人に似通っている。ややおっとりとした表情は、彼女が特殊作戦群の兵士だとは思えないほどだ。

フェルメン・ロイヤルロッド准尉は16歳、この第4分隊では最年少に位置する。5年前にベルカ公国と戦争を行ったウステイオ共和国出身で、彼はウステイオ正規軍の兵員訓練カリキュラムから出向している身である。5年前のベルカ戦争で、ウステイオ共和国軍は数多くの正規軍兵士を失った。同時にこれはウステイオ共和国軍内部の人事一新と全面的な軍再編を呼び起こした。その際、実戦経験のある兵士の数がえつたいたに不足したことから、敵国であったベルカ公国に倣い、クルザンド軍に兵を派遣している。彼は茶髪と黄色い瞳を持ち、またベルカ人とは元は同じ民族であったことを象徴するように、非常にがっしりした体格だ。

そして、レイラ・ストライカー准尉は19歳。彼女は敵国である聖ガドリア王国の宗主国である、源聖レクサリア皇国出身だった。彼女がクルザンド軍の軍人になったのは、他の面々とは異なり、源聖レクサリア皇国に対しての復讐のためだった。彼女はレクサリア北方にある少数民族サウーラ族の出身なのだが、サウーラ族はすでに彼女を残して滅亡している。天然資源が多く採掘される地域に住んでいたというだけで、この少数民族は弾圧され、虐殺されたのである。むろんこれは表舞台には決して公表されない情報であるが、彼女はその事実を知っている。知っているからこそ、彼女はレクサリア国内で声を上げるのではなく、クルザンドで刃を振って復讐する道を選んだ。それでも、クルザンドに初めて来た当初よりは、その復讐心はだいぶ柔らいでいる。無論内心ではその復讐心は続いて

いるのだろうか。

紫色の髪を少年のように短く刈り込んだそれは、彼女をすぐに判別できるという意味では大きな特徴であっただろう。

「さてと。おやっさん、俺たちは何をすればいいんで？」

グレンは両手を腰に当てながら言う。彼らの部隊指揮官であるクリューガーを、彼らは敬意をこめておやっさんと呼ぶ。そう呼ばれた小隊長は、軽く肩をすくめた。

「すぐに説明してやる」

そういつて、彼はブリーフィングルームの中央にある巨大な円卓上のテーブルに設置されたスイッチを押す。すると、突然テーブルの中央部が光り出し、そして地図がテーブル上に立体的に浮かび上がった。

ホログラムテーブルと呼ばれるそれは、現代の技術では作り出すことができない物だ。これは各地に点在する遺跡の中から情報を得、もしくは遺されていた異物を修復している。ホログラムテーブルは、クルザンド国内の遺跡から発掘し、ベルカ人技術者たちの手を借りて修復したものだ。そこに移されていた地図は、今居るレウルーラを中心とした、イーリオス州のものだった。

「今、ガドリア軍はディレスタに主力を置いている。その規模は10万だ、最近では最大兵力だな」

「で、この敵部隊が明日にはこっちに向けて進軍してくると」

「そういうことになる」

ケラーマンは頷いた。ここにいる若い兵士たちは、大規模な騎兵部隊がうろついているのは偵察しているだけであることを理解していたのだ。

「じゃあ、俺たちはまた後方に回り込んで敵の補給部隊潰しとかやるんで？」

「いや、今回お前たちには、敵の総司令部を直接たたいてもらう」

一瞬、6人は互いの顔を見合わせた。敵の補給線を遮断して、敵部隊の物資の枯渇を待つて戦力を消耗させていくというやり方が、この場合最も有効ではないかと6人は思っていたからだ。

補給線を遮断するというのは、地味に思われるかもしれないが非常に重要な戦略的作戦だ。軍隊というものは、物資を消費するだけで生産しない組織だ。つまり食料や武器は生産できない。まして現地では、武器は敵から奪えても食料を生み出すことなんてできないのだ。そこで補給部隊などに食糧を運んでもらうわけだが、この食料も、10万人の軍を維持するには膨大な量の食事がいる。

たとえば、10万の兵を1週間食べさせるだけの食料を運び入れるとする。この時、その補給部隊は一度に21万食もの食料と、10万の兵士の飲み水運び込まなければならぬのだ。もしそれだけの物資が補給できないようなことになれば、兵士たちは飢えてしまう。古今東西、飢えた軍隊が戦争に勝利したことがないという事実を知る者は、前線よりも後方の補給部隊の動きにこそ細心の注意を払うのである。

ゆえに、攻撃するならば敵の補給線をたたき、敵を日干しにして撤退させるというのが、クルザンド軍がとるべき基幹戦略であろう。事実これまではそうであったし、今後もそうだと彼らは思っていたのだが、どうも今回はそういうわけにはいかないらしい。

「敵の補給部隊の動きを調べてみたのだが、どうやらガドリア軍は補給部隊の護衛に1万の兵を付けているらしい。さすがにこの人数を相手にするわけにはいかん」

6人は精鋭だが、だからと言って圧倒的多数の敵を同時に敵に回して勝てる、というわけではない。もし勝てる人物がいるとすれば、それは彼らの小隊指揮官だけだろう。だが彼はこの作戦に実働部隊として動くわけにはいかなかった。彼はレウルーラを脱出する民間人の護衛の、最後尾についてもらわなければならないからだ。

「成程ね。でもおやっさん、敵の総司令部だって充分嚴重だと思っ
ぜ？」

「まあ、野戦ならな。だがレウルーラの中に誘い込めれば、どうなる？」

6人の顔色が変わった。

「まさか、レウルーラを空にするのは、敵主力をこの中に閉じ込めるんじゃないかって、敵の司令部をつぶすためっすか？」

ケラーマンが頷く。彼の考案した作戦は、ある意味では無理難題であり、狡猾であった。ガドリアにとってもレウルーラは大事な都市であり、敵はレウルーラが空であれば、すぐにでも司令部を設置しようとするだろう。そしてその状態から、勢いに乗ってエリシオン州に乗り込もうとするだろう。だがその時に知リエ部が壊滅する
ようなことになればどうなるか？

少なくとも、作戦どころではなくなる。司令部が壊滅するという事は、友軍部隊との連携が取れなくなって各個撃破されてしまう可能性が高くなることを意味するからだ。それでなくともガドリア軍

は、軍の運用は司令部からの命令がなければ現場は全く動けない官僚的なものだ。もし司令部壊滅の事実が気が付かずにこちらを戦えば、ガドリア軍は壊滅に追い込まれるまで戦う羽目になるだろう。

もし補給部隊の護衛戦力が貧弱であれば、ある種の博打のような作戦をとることはしなかった。このような作戦はケラーマンの本意とするところではないが、現状ではこれが一番成功率が高い作戦だったのだ。6人の若い兵士は、自分たちを納得させ絵うようにうなずいた。

「となると、俺たちはレウルーラのどこかに隠れなきゃならんわけだ」

「場所に関してはすでに用意してある。そこに隠れてチャンスを待て」

「了解。で、他に何か必要になるようなものはあるのです？」

グレンの問いかけに対し、クリューガーがないと答えると、じゃあさっそくと言わんばかりに、グレンは自分の部下を連れてその隠れ場所に向かっていく。どうやら、グレンはセネルたちが行った作戦に自分が参加できなかったことが面白くなく、今回参加できたことがうれしいらしい。クリューガーは軽く肩をすくめ、ケラーマンに訊ねた。

「ところで、大佐はどうなされますか？ 最後の脱出便に？」

「そうだな。少なくとも、ここの司令部連中と一緒に脱出させてもらうさ」

ケラーマンはそう言って、クリューガーを下がらせる。クリュー

ガーの方も、住民の避難計画に携わらなければならず、やるが多々残されている。彼はそちらの方を片付けるべく、急いで自分の執務室があるフロアへと向かっていくのだった。

―聖歴1000年3月16日―

―クルザンド王統国　イーリオス州　ディレスター―

―17時05分―

ガドリア軍第2騎士団は、自分たちの任務を終了し、ディレスタの方まで帰還してきた。戦闘らしい戦闘も行われず、全員が生還したことは、実のところガドリア軍内部ではあまり好まれていなかった。原因は、指揮官であるバウリスクの出身にあった。

「下賤の者の指揮官め。どうせ敵を見てすぐに逃げてきたのだろうさ」

この手の嫌味などを聞くのは、もうバウリスクにとっては慣れたものであった。平民出で騎士団長になった人間など、ガドリアの歴史でも殆どいないし、居たとしてもすぐに潰されてしまう。騎士と

いうのは貴族だけのものだと考えるものはまだまだ多く、ましてや騎士団長に平民が就任したというだけでも、伝統を重んじる貴族たちには許し難い行為だった。

第2騎士団は疎まれている、自分たちは平民の騎士団長に従わされている身なのだという事は、貴族として既にマイナスの評価を与えられるものだ。一方で、第2騎士団では貴族社会特有の年功序列ではなく、実績によって小隊の指揮などを任せてくれるという事もあり、手柄を立てたい、自分の技量に自信のあるものは進んで第2騎士団にやってくるという事も珍しくなかった。

バウリスクが司令部に報告に向かうのを見届けてから、クロエは結局使わなかった剣を手にとっていた。バウリスク騎士団長が言うには、「剣というものは使わないことにこそ価値がある」というのだが、現状でクロエはそういうわけに行かない。自分自身のために何としても剣を振る必要があるのだ。だが、今回のように、敵はいともすぐに逃げられてしまうのではどうしようもない。

「……クルザンド人は、本当に戦う気があるのだろうか？」

このクロエの問いかけは、両国の軍事的事情を知るものが聞けば少々違うものだと思っただけかもしれない。無論クロエにはまだ、そこまで深く考えるという余裕はなかった。

「ヴァレンス」

ふいにクロエは、どうも別の騎士団に所属しているのではないかと思われる騎士に声をかけられた。クロエはその人物に振り向くが、彼女の全く知らない顔だ。

「そなた、今日の任務で何ら手柄を得なかったそうだな」

「……そういった任務です」

クロエは苛立った。相手が何を言いたいのかすぐにわかったからだ。女が前線に出てくるな。この騎士はそういいたいのだ。

だが、こういったことはこれまでも幾度となくあったから、クロエは苛立ってもそれを表に出さないようにする術を知っている。クロエは表面上は平常心を装いながら、内心では憤激しながら相手の話を受け流す。

「ふん、どうせ女には手柄の一つも立てられんのだ」

「このたびの任務、だれも手柄を立てておりませんか？」

相手の騎士は、明らかに怒ったような表情を見せる。思わず右手が動いて、抜剣しようとしているように見えた。だが、その手が急停止する。相手の騎士が表情を凍らせたのを見て、クロエが別の方向に視線を向けたとき、1人の騎士がすさまじいほどの形相で、クロエに抜剣しようとした騎士を睨んでいた。

「貴様……何をしようとした？」

「い……いえ……セリオーニ子爵どの……」

「ならばさっさとここから去れ。ここは第2騎士団の野営地だ、他の騎士団の者はされ！」

怒鳴られてた騎士は、クロエに一瞥するまもなく、文字通り遁走した。クロエは自分をかばってくれたビル・セリオーニ子爵に頭を下げる。

彼は第2騎士団では、2000騎の騎兵を指揮できる身にある。

もともと貴族間のくだらない付き合いが苦手な人物で、風評などにせずに、自分が好きに戦える環境を求めてこの第2騎士団に自ら所属した人物だ。顔にいくつもの傷があり、彼が歴戦の人物であることを教えてくれる。

「ありがとうございます」

「気にするな。それより、奴は知っている奴か？」

「いえ……全く知りません」

「やれやれ……ヴァレンス。あの手の類が来たらまとめてこっちに持って来い。第2騎士団の野営地内を愚痴を言って回られるのは士気にもかかわる」

つまるところ、クロエやバウリスクに対して不平不満を好き勝手にぶつけて周っている輩が多いという事らしい。セリオーニはそういった連中をいちいち追い出すのも自分の仕事であるかのように言っている。

「要するにだ、あの手の輩のいう事は気にするな」

「……ありがとうございます」

クロエは思わず微笑んだ。この年配の騎士は、この場では彼女しかいない女性であるクロエのことを心配してくれているらしい。よく考えれば、セリオーニとは親子ほどの年が離れている。確か、セリオーニ子爵にはご子息がいたな、とクロエは思い出した。

「そういえば、ご子息はお元気ですか？」

「ん？ ああ、奴ならこのたびの戦に参加している。いい加減戦場に出てもよい年だからな」

そういうセリオーニ子爵の表情は誇らしそうであった。代々武門の家柄だというのは、実はヴァレンス家度も同様なのだが、恐らく指揮官を多く輩出してきたという点では、ヴァレンス家はセリオーニ家には及ばないのだ。そして、戦場で命を落とした騎士の数という点でも。

そう思った時、クロエは自分も、命を落としてしまうことはあるのだという事を今更ながらに思い出した。そして、あの時自分を助けてくれた敵兵も、この戦いにどのようなに加わってくるのか気になった。

多分、自分はあの敵とまた戦うことになる。クロエはなぜか、そのことに限って、絶対的な自信を持っていたのだった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6267z/>

Tales Of Legendia Another Apocalypse

2011年12月30日22時48分発行